



北九州若松洞海湾における 船上生活者の歴史的変容

田上 繁

(非文字資料研究センター 研究員)

2011年8月1日より4日まで、北九州市若松区洞海湾の船上生活者に関する現地調査を実施した。すでに3月9日、10日に事前調査のため単身で当地を訪問していたが、今回は、その予備調査の成果をもとに、本研究を推進する共同研究メンバーとともに本格的な調査に入ったものである。洞海湾には、昭和40年(1965)代まで主に筑豊炭田の石炭を運搬する大小の船舶が多数碇泊し、活動していた。中には、陸上に家を構えず、船上で生活する海の民も大勢いた。しかし、現在では洞海湾の景観は一変し、石炭産業の興隆、八幡製鉄の創業といった日本の近代化の基礎を支えた洞海湾と船上生活者の姿は今はない。その痕跡はまさに歴史に埋もれようとしており、それらの記録化は緊急性を要する。

周知のように、江戸時代には、瀬戸内海や肥前(長崎)海域に代表されるような「家船」とよばれる一年中海上で暮らす船上生活者が存在した。ところが、江戸時代の「家船」の生業は漁業が中心であり、洞海湾の船上生活者が物資の輸送を主体にしたのとは大きく異なる。また、江戸時代には子供の教育という観点はあまり重視されなないが、近代以降では義務教育が制度化されたことから、船上生活者の学童に対する特別な教育環境を創り出す必要があった。そのため、生業の面でも、教育の面でも「家船」にはみられない特徴を、近代以降の洞海湾の船上生活者は有していた。本研究では、こうした差異を念頭に置きながら、近代化の一翼を担った洞海湾における船上生活者の実態と、その変容の歴史について追究する。

ところで、今回の調査では、船上生活の体験をもつ3名の方からオーラルヒストリーによるお話を聞くことができた。また、洞海湾における船上生活者や貯炭場で働く荷役労働者の活動を収めた写真や絵画資料が大量に伝存する事実を確認するとともに、荷役労働者を雇用していた経営者からもお話をうかがう機会を得た。児童の教育体制に関しては、当時、船上生活児童の寄宿舎であった児童ホームを訪問し、関連資料の有無などをお尋ねし

た。以下、今回の調査の内容を報告することにしたい。

1. 洞海湾に関する写真・資料の調査

北九州市立若松図書館には、洞海湾で操業する各種船舶に加え、石炭運搬に関わる船上生活者や荷役労働者に関する写真をはじめ、川舟(「川艦」)、貨車、風俗などの写真が膨大に所蔵されている。原田多賀子館長のご厚意によりそれらの貴重な写真を閲覧することができた。船舶では「帆船」「機帆船」「舢舨」などの風景写真があり、例えば、「機帆船」が写っている写真1からは、「機帆船」の帆柱が林立する往時の洞海湾の活況ぶりがうかがわれる。また、「舢舨」とは動力機を装備していないが、石炭150トン前後を積載、輸送できる「運搬船」をいう。動力機が装備されていないので船舶には含まれず、船舶免許も必要なかったとのことである。そのため、最盛時には多数の「舢舨」が洞海湾で操業していた。こうした洞海湾の景観を伝える写真は若松図書館だけでなく、わかちく史料館の畑野博史さんの説明によると、同館にも築港を中心とした明治以降の洞海湾関係の資料が大量に伝わるという。また、旧古河鋳業若松ビルでも洞海湾関係の資料を収集されており、地元の研究者でもある若宮幸一館長からは洞海湾全般のことを教えていただいた。今後、各資料保存機関に残る洞海湾関係資料の所在を確認



写真1 海に林立する機帆船の帆柱(北九州市立若松図書館蔵)

し、総合的に分析する必要がある。

2. 船上生活経験者によるオーラルヒストリー

今回の調査では、洪田幸子さん（66）、石橋英子さん（64）、田上キサ子さん（69）の3名の船上生活経験者からお話をうかがった。現在、テープ起こしの最中なので、その内容は今後の作業の進展にまちたいが、「昔のことは語りたくない」という方もいる中で、「両親の苦労が文字に残ることは嬉しい」（石橋さん）として、3名の方は船上での家族生活、「舢舨」での両親の仕事ぶり、雑貨・食料品などを小船に積んで売る「うろ」さんの行商姿、後述する児童ホームでの寄宿舎生活など、多くの貴重な話を語ってくれた。写真2は、船上生活の一端を示す炊事風景の写真である。「移動流し台」を船べりに出して炊事しているのは石橋さんの母親で、肩には鳩が止まっている。この鳩も単なる趣味で飼っていたのではなく、緊急時に陸に連絡するための伝書鳩ということである。ほかにも、「成人式のあと、家路につく姿を取材したいとの地元メディアの申し入れを断った」（洪田さん）、「土曜日の寄宿舎からの帰り、海岸で声を張り上げておらんだ（叫んだ）が、届かなかったので寄宿舎へ引き返した」（田上さん）など、興味深い話をたくさん披露してくれた。さらに、「機帆船」で働いた経験のある清水善治さん（76）からも、お話をうかがった。



写真2 船上での「移動流し台」による炊事（石橋英子さん提供）

を変更して帰船不能」となるため、「児童寄宿舎建設の急務なるを痛感するに至る」とある。そのため、若松石炭商同業組合及び筑豊鉱業組合から2万円の寄付を受け、昭和4年（1929）1月に古前小学校の隣に敷地を求めて着工し、6月に完成して収容人数120名の児童ホームが開館された。昭和4年から同8年までの年末在籍人数は、昭和5年の112名を最多に、いずれの年も100名前後を数えている。今回の調査では、現在の中島哲郎施設長から児童ホームの推移をお聞きしたが、今後、船上生活児童に対する当時の若松市の斬新な教育制度の評価とともに、その事業内容を解明することで、船上生活者の実態がより一層浮き彫りになってくるものと思われる。

3. 荷役会社及び児童ホームでの聞き書き

洞海湾におけるもう一方の主役は、石炭の荷役労働者たちである。現在も荷役会社を運営している(株)三菱の中山弘文会長から、先代が起こした荷役会社時代のお話を聞くことができた。石炭の荷役労働者には、「ごんぞう」と「沖仲仕^{おきなかし}」の二種類があって、前者が陸上、後者が海上で稼働する人たちをいい、両者を総称して「仲仕」とよぶという。また、荷役労働者が両方を兼ねることはないとのことで、両者を混同していた私には大変参考になった。ほかにも、荷役労働者の男女の賃金及び賃金格差、訳^{おきなかし}ありの流れ者をも受け入れる「飯場^{はんば}」の生活、海運会社と船上生活者との関係など、その聞き書きの内容は多岐にわたり、今後の研究に役立つ話ばかりである。

次に教育面に目を向けると、『若松市史』（名著出版）の「海員児童寄宿舎」の項に、「若松港には常時^{ていじつ}碇繋せる船舶式千五百余隻を算し、船内の生活者八千五百人を下らず、就学児童^{すこぶ}亦三百人余に上れる」として、「荒天雨雪の場合は通学頗る困難なるのみならず、急遽繋船場

本研究は緒についたばかりである。これから、地元の方々のご協力で得た写真資料、オーラルヒストリー、聞き書き、文献資料などを駆使しながら、船上生活者の歴史の変容の過程と、洞海湾の環境・景観の変化を重ねて究明していきたい。そうした船上生活者の変容と消滅の過程は、わが国における近代化の歴史と問題点を解く鍵であり、その意味では、本研究はわが国の近代化を問い直す糸口ともなろう。

◎調査参加者：森 武磨（研究員） 田上 繁（同） 藤川美代子（研究協力者） 近石 哲（歴史民俗資料学研究科前期課程） 新垣夢乃（同） 平田茉莉子（同）

[付記]：現地調査では、3月の予備調査を含めて、文中に登場する方々のほかにも、元森昌彦さん（若松料宿飲業連合会会長）、白木邦弘さん（福岡県立若松高等学校校長）、端野米泰さん（元 船具店勤務者）、洪田俊美さん（元 石炭貨物汽車運転士）からも多大なご協力、ご教示をいただいた。記して謝意に代えたい。何よりも調査を通じて貴重な資料に出会えたことと、多くの方々を知り合えたことは望外の喜びである。